

Zwischen neun und neun
Roman von Leo Perutz



Albert Langen München
中島明通信

ある日、亀ちゃんが重大情報を持ってきた。亀ちゃんは鎌倉小町通きっての情報通である。情報によれば、近頃小町通の商店街に夜な夜な泥棒があらわれているという事だ。この1週間の間だけでも2件もやられている。店の2階が住まいになっていて、いつも人がいるのに関らずやられているところを見ると敵はそうとう自信のあるプロだと亀ちゃんは確信している。とにかく、レジは夜中は開けっ放しにして、カウンターの上に2000円くらいは置いておくんだよ。何もないとわかって腹いせに何か壊していくからな。わかったね。2000円だよ。と言いつつ帰っていった。そういえば、少し前から鎌倉の骨董屋荒らしが頻繁にあるということは聞いている。由比が浜通りのA店などは別棟の倉庫に入られたらしいが、店とは別棟になっているという話をその泥棒がそれを知っていたということも不思議な話だ。それに万引きは頻繁にある。ミルクホールでも何度かやられている。なくなったものと考えてみるとかなり骨董に明るい者の仕業だと思われる。専門的知識のある骨董ドロと、寝静まった商店狙うプロの泥棒...同じ人物でもあるまい。ある朝早く小町通を歩いていると老舗の骨董屋さんのショーウィンドウの周りに人が集まっている。どうやらその人達

はおまわりさんと刑事さんらしく、夜中のうちに割られたガラスの現場検証をしている。泥棒だ！骨董ドロと、商店狙いと、ガラス破る押し込み強盗だって？なんてこった。町の夜の飲み屋の噂にも平和な商店街らしからぬ不穏な話題も出始めた。そうこうしていたが、なにごともなく月日が過ぎた。

記憶から消えかかったころ、実家の父との世間話の端にその話が出た。...でも2000円置いておけばどうにかすむらしいんだ。するとそれまで気のない様子で聞いていた父が急に怒り出した。

「冗談じゃない！それじゃ日当にもならんじゃないか。泥棒だってせっかく入った甲斐がないというもんだ。」

「じゃあ、幾ら置いておけば...」「まあ、2万円が妥当なところだろう。俺はいつも2万円置いてる。」「今も？」「もちろんだ。」

ふう...そうなのか。堅物でケチが誇りということで通ってる父だ。世の中は難しい。

それにしても、家で盗まれた骨董品達はその後どうしたのかな？ベニーグッドマンの蓄音機のレコードアルバムなんて今ごろ誰か聞いたりしてるのかな？

近所の人々が引越する記念にくれた明治のガラス・初期伊万里の白いお茶碗。まっぴか。

縁があればまた会うこともあるでしょう。

VALLEY

谷間の雪

ぼつぼつと白く咲き始めた春の花の香りにつられてふらふらと歩いていくと、ここにもあそこにも、今まだ枯れ木の鎌倉の低い山の斜面に梅の木がいつそう美しく花を咲かせている。梅の花に誘われて奥へ奥へと、いくつもの薄暗い竹やぶの中を通り、苔むした鎌倉石の洞窟をくぐり抜けると、目の前には小さな谷戸が現われる。

歴史の時代のその昔には武士達の格好な要塞か、それとも落ち武者の隠れ里にでもなっていたのだろうか。岩肌の剥き出した山々に阻まれた、人がやっと二人並んで歩ける程度の洞窟の入口だけが谷戸から外界に通じる唯一の道である。

しんとして昼間でも夕暮れのように薄暗く、敗れ武者たちの亡霊漂うかの気配さえある。谷戸の中に入ってしまうと、それでも一日の内には、谷間から見上げる高い空から明るい日差しが差し込む時間もあり、木漏れ日と調和して谷戸を囲む岩肌に美しく映えている。

今では、かなりの門前家の家が少し高いところに一軒、中ほどに一軒、そして奥にも一つ建っており、騒々しい世俗とは無縁の様で、洞窟の入口に掛けられた表札が謎めいてごくまれに通りがかる人の好奇心を誘うが、どの家も人の気配はない。

その三つの家の一番奥の少し低い所にある家が、彼の家である。

呼び鈴を鳴らしても返事はない。彼は奥の書斎にこもっている。勝手に玄関口に入り、冷たく暗く長い廊下を通り抜けると、ドアが少し開いて、いつものように彼が顔をのぞかせた。「やあ、来たかい？」部屋の中は温かく、テーブルには二人分の紅茶と菓子が用意されている。

彼と私は大学時代からの友人ではあるが、同じ鎌倉に住んでいながら、もともとそれほどの交流はなかった。十年前、偶然帰宅する同じ電車に乗り合わせたとき別れ際に、彼は私に家に来るように誘った。以来、私は今日のように不意に思いついてこの家を訪れるのだが、今まで彼が留守にしていたことは一度もない。

何故かいつも私に来る時を知っていたように温かいお茶が二人分用意されている。それもこの十年間変わらない。奥さんが用意しているのだろう。この部屋にはいつも残り香がある。たった今までそこに座っていたかのような...

彼の奥さんを見かけたのも最初に訪ねた時一度きりだ。それも和服の後ろ姿をちらりとだけ。その時の香りがそのままにこの部屋にはある。

窓の外には春の雪がちらちら降り出したようだ。向かい側の岩肌にも雪は風に乘って舞い下りる。

カラ カラ カラ...『ん？何か言った？』『いや、何も...』

カラ カラ カラ...耳をよく澄ますと、机の上の箱根細工の箱がカタカタ音を立てているようだ。彼は大切に箱を手にした。

『珍しいな、近頃何も言わなくなったと思っていたのに...』

カラ カラ カラ...とまた音。彼はいつそう大切に箱を両手の中につつまこむ。

音はいつまでも止まない。気がつく夕暮れを知らせる寺の鐘の音が鳴り始めた。

重く低く唸るように谷底に鳴り響く。

『...その箱の中には、いったい何が入っているんだい？』

『この箱の中にはね、僕の妻の骨が入っているんだ。僕にも二度と取り出すことはできないけれどね。彼女は今がとっても幸せそうだよ。何よりこの谷間に舞い下りる雪が好きなんだ。』

『君の奥さん、亡くなったのかい！？』

『もう すつと昔にね。もう十年も前の事だよ...』

INFORMATION

ミルクホールタイムスをいつも購読頂きありがとうございます。

ミルクホールタイムスでは皆様からのご投稿、ご意見、感想などお待ちしております。FAXやEメールなどでお寄せください。

fax 0467-22-1179

<http://www.milkhall.co.jp/>

